

学院・学部学生諸氏の協力により順次刊行されることになった。計画では、鉄山関係・地方関係・山林関係・家政関係その他の文書之部四巻、典籍之部一巻、合計五巻になる予定のよし。第一巻は鉄山関係の殆ど全部を網羅している。

内容は、甲「生産」、乙「販売」、丙「その他」、丁「藩營鉄山」に分類され、甲・乙は共に元禄以降の鉄生産と販売の史料を、丙は明暦二年の鉄山格式以下運上銀などの対藩関係・売券・貸借証文・砂鉄銑鉄の運搬関係・米炭直段・絵図等を収め、丁では山県郡大塚村・溝口村で稼行された藩營鉄山関係史料を、それぞれ目録として収めている。その余慶をこうむるところ、ひとり鉄山史の研究者のみならず、近世史研究の全般に及ぶであろうことはいうまでもない。関係諸氏の労に感謝するとともに、所蔵者であり刊行者でもある加計氏に敬意を表し、あわせて第二巻以下の速やかな刊行を願ってやまない。

(B5判二九四頁 昭和三八年一月刊 事務取扱 広島大学附属図書館)

(朝尾直弘)

豊中市史編纂委員会編

豊中市史

豊中市当局においては、昭和三十一年十一月、いわゆる市史ブームのさなかに、市政二十周年記念事業として、今は亡き魚澄惣五郎博士を委員長に仰ぎ、市史の編纂に着手した。その執筆には鳥越憲三郎・小林茂・藤沢一夫・末中哲夫・藤本篤・加藤重義の諸氏が当り、昭和三十四年三月本編第二巻の発刊を手初めに、三十九年五月本編第四巻の頒布を最後にして、本編・史料編各四巻の計八巻の浩瀚な市史の刊行を完了した。これを手にして先ずその装釘・印刷の実質的で、しかも物惜しみしない技術の豪華さに好意が感じられるが、更に内容を繕いて、本編では市史の事実が精細に調査され、国史の流れの中において叙述されていること、史料編では考古資料のコロタイプ写真と解説、古代から近世に至る豊富な文献史料を収録し、ことに学界未紹介のものを含む中世の地元史料が全面的に収められていること等において簇出する地方史誌の中でも特に出色と信じるので、敢えて紹

介の筆をとる次第である。

先ず本編第一巻の考古学の分野では、遺物・遺跡それ自体に関する詳細きわまる調査が記され、史料編における豪華な写真・解説と相俟って本書の一特色をなしている。そしてそれらを歴史学の問題に安易に結付けないのもよいことである。考古学と歴史学の関係について学問自体の性格がたがいに異なるのか、それとも両者は分化すべきでなく総合さるべきなのか、いろいろに考えられるが、安易な総合はあくまで排除すべきであろう。ただ「新撰姓氏録」にみえる氏族名と現在地名・古墳の一体性について推定が試みられているが、相互に時代的な食違いのあり得ることを考慮した上で可能性の問題として叙述されたのなら一層よかったと思う。

次に律令時代の章で、倭名抄豊島郡の郷のそれぞれの区域をすべて現在の地域に決定つけてあるのは(一ノ一三六頁)いかがであらう。郷区域の現地比定は江戸時代の地誌以来たびたび試みられているが、そう判るはずのものでない。ことに流布本の載せている余戸など特殊な狭い地区に相違ないが随分広域とされているのはどうであろう

か。同じく流布本の駄家（延喜式草野駄か、市史には駄制にほとんどふれていないがなぜだろう。）なども駄戸から成る小集落だったろうが、そうした考慮が払われていない。

これに反して条里制については比類なき入念さをもって坪名調査が行われた上で文献史料を照応させ、豊中市域における複雑極まる条里制の復原に最高度の結論を導出されているようで、その努力に対して深甚な敬意を表したい。

律令時代につづく荘園制については、一般論として現地に史料が伝存する場合は稀で、その研究は大社寺など荘園領主に伝えられる史料に依存せざるを得ないのが普通である。然るに本市には大大な今西家文書が存在が知られながら従来ほとんど利用されず、時たま史料編纂所の影写本で研究されても、後世の加筆を弁別しないで誤用される類のものであったが、本市史では直接原本に当って研究され、榎坂郷についての詳細な社会経済史的動向の考察に成功している。即ち文治五年春日社領垂水西御牧坂郷田島取帳と貞治元年の同御牧領家舎人名寄帳との対比から、前者における加筆の年代を推定し、鎌倉末期中心の新名進出の

時勢との関連において経営の利害や開拓進展の様相を発展的にあとづけている叙述はすぐれた研究と思われる。こうした所論と関連して本市史最大の特徴は、史料編第二巻の全冊を今西家文書に充てたことであって後世の加筆もまた明らかに示され、同家中世文書は細大洩らさず初めてその全貌を現わしたわけである。この史料集の今後学界に対する貢献は少くないというべきであらう。

しかしながら同じ分担者が室町戦国期の信仰において真宗の発展をたどるに当って、極めて史料的価値の低い近代編纂の地誌・由緒書の類に対して何等の批判や疑念を挿むことなく有力真宗寺院の創立や他宗からの転宗について記述されているのはいかがであらうか。

本編第二巻は近世に充てられる。江戸時代この地方は麻田藩をはじめ、公家領・天領代官支配地・旗本知行地など雑多な領有関係に分かれ「基石を打交候様」な状態を呈していた。その限り現在の市域を統一的看着のは困難であるけれども、同時に京坂の二大都市を近くに控えた上方農村地帯として見る場合は近在諸村とともに一つの

地域をなすものである。本章はそうした社会経済的に進んだ上方農村という特色に中心を置いて、農業生産の発達、商業資本の浸透と商品作物の進展、村落の変貌、岡町の発達などが主題として取挙げられ、国訶問題・下尿問題についても具体的に述べている。そして江戸中期以降に起る新しい諸様相を「幕藩体制の衰亡」の題下にとらえ、農業生産の停滞、領主財政の窮乏、新地主の台頭、村落の窮乏と農民の反抗などのテーマのもとに、わが国近世社会全体の問題を当地域の事実即ち叙述せられているのも、地域的史実を全体的な姿において要因的発展的に把握しようとする執筆者の識見を遺憾なく發揮されたものといえよう。ただその反面において近世における諸制度そのものに関する事柄や、各種文化の様相とその展開についての叙述が比較的簡単に過ごされているのは、できるだけ満遍なく広汎な体系づけの要請される市史の公的性質という立場からは問題がないとはいえないであらう。

しかしこの市史を利用する立場としては、このような感想も何等の障害とならない。即ちこの章に照応する近世史料としては史

料編第三・四巻の二冊が充てられ、第三巻が編年史料、第四巻が比較的まとまった記録類数十種を分類収録してあり、まことに豊富にしてよく整った近世史料集として、研究者はそれぞれの立場において自由にこれを利用できるからである。

本編第三巻は明治維新から昭和二十年の終戦までを扱っている。その中町村制施行までは、他の市町村史にあっては史料の貧困から記述もまた貧弱なのが普通であるが、本市史においてはむしろ史料に恵まれた方であることと、執筆者にその人を得たことによつて精彩あるものとなっている。町村制施行以後については役場・学校等の資料が主である関係からか、制度的或は年次的記述がいささか目立ちすぎるようであるが、近代は非常にむづかしい分野のこととて、特殊な主張をもたない叙述態度は市史の性格からいってもやむをえないことであろう。しかしその間においても交通の発達から大阪の衛星都市としてまた住宅地として発展して行く豊中市の性格は明確に活写されている。

第四巻は終戦後を扱った「現代の豊中」の章を初めに置く。人文地理学的叙述を含

み、交通と住宅の問題など市の特性を重視しながらも、戦後十数年間の動向が客観的にしかも動的によく叙述されている。そしてこうした分野には市政関係者側からとかく要請がありがちであるが、そうした痕跡が認められず、個人の人名がほとんど出て来ないのも好感がもたれる。

その次におかれた民俗の章と文化財の章は他の通史とは次元の異なるもので各説的性格をもつものである。豊中にある農村的性格が近時失われてきたのに伴つて古来の民俗もまた急速に亡滅しつつあるとき、民俗の一章を設けて豊富な内容が盛り込まれたことは執筆者にその人を得たことと相俟つて貴重な金字塔といふべきである。

また文化財の写真・解説も、記録的であると同時に啓蒙的役割を果すこと大であり、小字表・年表・折込地図とともに、本市史の利用価値を大ならしめるものである。

以上を通じて本市史の体型には各執筆者の関心のあり方や史観において若干の相違のあるのはやむをえないが、通史としての発展的叙述に重点を置いて比較的よく統成されておき、他の市史に往々見られるような百科全志的あり方を脱却していることが

特色として挙げられる。また体的には本編はA5判で白色紙を用い、史料編にはB5判厚手クリーム紙とたがいに異なることが一見奇異に感じられるが、編纂当事者によれば、これにも意図があるよしで、前者が親しみをもって読まれることに主眼をおくに對し、後者は史料保存に重点をおき、周辺の余白を多くして後世における度々の製本のやり直しに堪えるように配慮されたそうである。ただそれにしては誤植が双方を通じて必ずしも少くなく、些細ではあるが事実の誤記も往々見受けられるので、何とか正誤表を出してほしいものである。毛を吹いて疵を求めるとは如き妄評を加えたが、これも立派な市史の完成を喜ぶあまりの駄足と諷解いただければ結構である。(本編A5判、第一巻四一三頁、昭和三六年三月刊、第二巻三五二頁、昭和三四年三月刊、第三巻四〇一頁、昭和三八年一月刊、第四巻六〇八頁、昭和三八年九月刊、史料編B5判、第一巻コロタイプ図版五二枚文獻一三〇頁、昭和三五年三月刊、第二巻五五八頁、昭和三六年三月刊、第三巻六〇七頁、昭和三七年三月刊、第四巻三六七頁、昭和三八年三月刊、豊中市役所発行、非売品)

(福尾猛市郎)